

## くりかえすな

### —全日空機衝突事件—

8月25日、日本武道館で全日空機遭難合同慰霊式が行なわれました。  
去る7月30日、千歳空港を発ち羽田に向かう全日空機が岩手県平石町付近の上空で訓練中の自衛隊機と接触し、162人が死亡。空前の飛行機事故に関係者に深い反省と万全の対策が促されたのです。  
佐藤内閣総理大臣は「陸海空を問わず交通量は日々増加の……今後、さらに過密化する航空交通のあり方に再検討を加え安全対策に全力を傾ける決意であります」  
持主を失った遺留品が淋しく並び、162人の面影を残している。  
ニアミスが相次ぐ日本の空。今は亡き御霊に応えらるべき安全な空を一日も早く確立しなければならぬのです。

## 戦後26年

# 未 帰 還 者

昭和20年8月、日本の敗戦は、もはや時間の問題であった。倉持鼎さん（当時国民学校校長、36歳）は牡丹江<sup>カネエ</sup>省寧安県石頭<sup>カネエ</sup>で現地召集を受けた。敗戦の3日前、8月12日のことである。哈爾濱<sup>ハルビン</sup>・新京<sup>レンギョウ</sup>を経て敦化<sup>トンカ</sup>第一指令部へ行くはずであった。しかし、倉持さんはこの日を最後に消息を絶った。戦後26年、妻の美知さん（立川市・羽衣町1-5-6）は二人の子供をかかえて必死に生き抜いて来た。時間を見つけては、知人に手紙を書いた。また厚生省や都庁援護課にも足繁く通った。しかし、夫の手掛りは一方向につかめなかった。今では二人の子供も結婚して独立した。これといった趣味を楽しむ時間などなかった美知さんは裁縫が好きだ。いつ帰って来ても着れるようにと作ったユカタはもう何枚もたまった。一針一針に夫の帰りを祈って縫う時、夫の幻影が頭の中をかすめる。

折から東京千代田区の日本武道館では政府主催の「全国戦没者追悼式」が行なわれた。

「26年間探し続けました。今もきっとどこかで生きていますと信じております」と語る美知さんは、華やかな式典から目をそむけた。夫の帰還、それはいつの時になるかわからない。だが、今の美知さんに残されているものは、ただ「待つ、ということだけしかない。